

ダロウによる感嘆文

鄭 相 哲

キーワード：「ダロウ」「感嘆文」「喚体と述体」「文類型」「感嘆副詞」

1. はじめに

いわゆる推量の助動詞と言われるダロウ文には、ダロウが命題内容、事柄を押し量るとはとても考えられない、次のようなものがある。

(1)「何て頭のいい奴だろう!」

佐久間が話を聞いてため息をついた。(セーラー服、178)

(2)「なんて気もちのいい方なんでしょう。私も、あの方みたいにうまれてきたかったわ。つままない、私」(若い人、196)

このダロウは、次のようにタブン・オソラクなどの推量の副詞と共に起ることが出来ない点や、意味的にも新しい事実を発見した時の主体の強い情意を表わすといった点から、(5)のような推量の意味を持つダロウとはかなり異なった働きをしていることが分かる。

(3)「*タブン (オソラク)、何て頭のいい奴だろう!」

佐久間が話を聞いてため息をついた。

(4)「*タブン (オソラク)、なんて気もちのいい方なんでしょう。私も、あの方みたいにうまれてきたかったわ。つままない、私」

(5)「恐らくこの青年は、姉の死因を、徹底的に調べようと思っているのだろう。(遠い声、99)

このようなダロウ文は、「常に一の體言を骨子として、それを呼格とし、それを思想の中心点として構成せらるるものなり」という山田(1936)の規定からすると、「美しき花かも」のような感動喚体の文型に近いものと思われる。しかし、それ以来、現代語を対象としたこういった議論は管見の限りあまり見受けられない。そこで、本稿では上記のダロウ文を感嘆文の文型の一つとして捉え、その分析を試みることにする。

考察の手順としては、まず2では日本語の感嘆文についての先行研究とその問題点を概観し、3では先行研究を踏まえた本稿の立場から、感嘆文の範囲と類型を明確に限定し、感嘆文の一般的な特徴や性質を指摘する。その後、4では統語・構文・意味的な観点から上記のダロウ文の分析を行い、その位置付けを試みることにする。

2. 従来の見解

ここでは、以下の議論と深く関わる先行研究を簡単に紹介し、その問題点を指摘することにする。

2-1 山田(1936)

山田博士が句をその形式的な面に着目して、用言を中心とする述体句と体言を中心とする喚体句とに区別したことはあまりにも有名である。感動喚体と希望喚体に二分される喚体句を、博士は次のように規定している。

「喚体の句は常に一の體言を骨子として、それを呼格とし、それを思想の中心點として構成せらるゝものなり。これはその直感的一元性の發表にして、感情的の發表形式をとることに於いて、述體の句の理性的二元性の發表たるものと性質と構造との二面に於いて根本的に違ふものとして對立するものなり」(山田孝雄「日本文法學概論」P937)

さらに、博士の感動喚体句は上記の規定の他に、次の二つの形態的な条件が要求される。まずは「妙なる笛の音よ」の下線部分のような連体格の部分である。次は「——サ」タイプの以外の例では、「妙なる笛の音よ」のように句末に必ず「か・かな・よ・や」の助詞を持っていることである。

しかし、このような山田博士の感動喚体は古典語を対象としたものである。従って、現代語にこの規定をそのまま適用するわけにはいかないが、言語主体が表現しようとする内容とそれが表現される形式との関連性を論じた点は、現代語においても注目に値すると言っていだろう。

2-2 尾上(1986)

尾上(1986)は、表現内容と表現形式との関係のあり方という観点から、驚きや感動を表現する文の中で、下記の(A)から(E)までに類型化される文形式を持つものを感嘆文と呼んでいる。

(A) わあ!

(B) ねずみ!

(C) 痛い!

(D) 青い空!

(E) 空が青い!

しかし、上記のように感嘆文の類型をとらえると、以下のようなことが問題になるだろう。

まず第一点は(A)のような感嘆詞だけのものを感嘆文の類型として認めてもいいの

か、という点である。^{注2}というのは、例えば英語の「OH!」や「alas!」等の感情感嘆詞だけのものを感嘆文の類型と言えるだろうか、という疑問が残るからである。もし、これを感嘆文の類型の一つとして認めるのなら、同様の理由で「LOOK!」「ホラ!」「コラ!」などの命問投詞も命令文の一つの類型として認めなければならないだろう。

第二点はEタイプの文を感嘆文の類型として認める根拠は何か、という点である。つまり、感嘆文としての「空が青い!」と平叙文としての「空が青い」との類型的な違いが認められないのである。氏は、このタイプが助詞を取ることの中に係り結び的な決定的な分節を未だに拒否する姿勢があり、その限りでもに通う一体性がかるうじて残している、としてあるが、「空が青い」のような平叙文でもこれと全く同様なことが言えるので、この文形式を感嘆文の分類型とするにはやや疑問が残る。

第三点は、Cタイプの文である。氏はこのタイプを「痛い!」のような形容詞文に限定しているが、その事実と根拠ははたして妥当なものなのか、という点である。次は名詞述語文であるが、氏の分類ではこのタイプに属する例ではないだろうか。

(6)「私の売る菓は、少量ずつ使えば、人生をこの上なく楽しくさせてくれる。しかし、量を誤ると一この通りだ」「人でなし!」(青春、72)

第四点は、感嘆文と詠嘆の平叙文との違いである。氏は感嘆文を「感情の生起」であり、詠嘆を「強い感情の存在」であるとしているが、これだけではあまりにも漠然としすぎるので、両者の区別が困難である。というのは、感情が生起するというのは同時に存在することを意味するし、感情の存在というのはその生起が前提にならなければならないからである。これは「対象との遭遇による心の変化の表現とある内容を深い感慨をもって承認する表現」とに言い換えられても問題が解決されるわけではない。もっとも、これは感嘆文を意味的な側面から規定しているからであるが、より厳密でより明示的な規定になるためには、その意味的な特徴が反映されている統語的な側面からの特徴をも踏まえた、両方からの規定が要請されるだろう。

第五点は次のような文の位置付けに関する問題である。

(7)歩きながら、どうも足の調子がおかしいな、と思った。一見すると、右足の靴がない。あわてて逃げてきた時に脱げてしまったのに違いない。「全く、何て夜だ!」と浜崎がグチった。(ハムレット下、210)

構文的な観点から考えれば、「青い空」のタイプに類似しているが、連体格の部分が具体的な修飾語ではなく不定語になっている点と、この構文がかなりの程度ボタン化されている点がやや異質である。とは言っても、氏の分類の中でいえばおそらく「青い空」タイプであると推察される。しかし、この延長線上のものと考えられる冒頭の例(1)(2)のようなものを、氏は考察の対象から除外されるとしている。

以上のような問題点を手がかりに、以下では基本的に山田(1904)と尾上(1986)の考え方を参考しつつ、上記の問題点を解決できることを試みた、本稿の立場を述べよう。

3. 本稿の立場

広義の感嘆文とは、言語主体の驚きや感動を表すものである、と言っていいだろう。しかし、感嘆文を他と区別できる何らかの形態的なマーカーを有しない日本語の場合、このような意味的な規定だけでは、感嘆と詠嘆との区別などあいまいな問題が多いので、不十分であると言わざるを得ない。このような問題を解決するため、本稿では狭義の日本語の感嘆文(純粹感嘆文)を、意味・構文的な観点から限定し、詠嘆(疑似感嘆文)と区別することにする。

3-1 純粹感嘆文(true-exclamatory sentence)

ここで言う純粹感嘆文とは、まず意味的な側面からは、発見的な認識による急激な感情的経験の全体を、ある中核になる語句に代表させて表現するものである。次に、構文的な側面としては、純粹感嘆文は未分化文である、ということである。このことは、もちろん感嘆文が急激な感情的経験を表現しようとするので、事柄の完全な描写をする心的な余裕のなきの反映であろう。この未文化文こそ、感嘆文の感嘆文たる所以である、と言っていいだろう。

純粹感嘆文をこのように規定するならば、この条件を満足させる文形式は、以下のよう¹⁸³に類型化することができる。

(イ) 「あ、ツバメ！」と百合子は叫んだ。

「今年になってはじめてよ」(結婚します、27)

(ロ) 椅子に座りそこねて尻もちをつく。

「いてえっ！」

「馬鹿、静かにしろい！」(寺内、179)

(ハ) 貫太郎にぶっとばされていた。ふっとびながら週平は叫んでいる。

「お！漚えパンチ！お母さん、おやさん大丈夫だって」(寺内、108)

まず(イ)タイプはある事態を発見的に認識し、それに伴う緊迫した主体の感情的な経験の全体を、事態を構成する中心的な要素であり、感情的な経験をもたらすきっかけになる対象に代表させて表現するものである。ここでの対象はものであるが、尾上(1986)が指摘するように実はモノではなく、ものを含んだコトである。つまり、ツバメは「ツバメが現れた」こととして理解すべき事態なのである。従って、主語が省略された平叙文やうなぎ文の「ツバメ」とは、性質が違う。

次は急激な感情的な経験の契機が、発見的な事態の中で対象のあり方にあるものである。このタイプの最も典型的なものは、(ロ)のように対象のあり方を評価的な感情・感覚的な述語をもって表現するものであろう。

しかし、評価的な感情・感覚的な述語だけがこのタイプに属する必然性は認められず、他の述語でも主体の情意を持ち得るしかるべき状況では、上述の例(6)のような名詞述語文だけではなく、(8)や(9)のように感嘆文として存在することができる。

(8)「いや、おみごとでした！」佐久間も一緒になって笑いながら、

「もう立派な親分ですよ」(セーラー服、202)

(9)「あ、死んじやった！」と英子は背くなったが、さすがに恭子は落ち着いている。若者の手首を取って脈を調べ、

「大丈夫よ、生きているわ。気を失っただけ」(青春、28)

次に、感嘆文の最後の類型として考えられるのは、急激な感情的な経験をもたらした事態を「客+主」の形で現れるものである。このタイプは基本的に情意のきっかけが事態の中の対象にあるものとして表現する点においては、(ロ)のタイプと共通しているが、主体の情意の部分を連体修飾語として顕在化させることによって、事態の描写に一步踏込んでしまう表現である。しかしながら、意味上の語順を逆転させることで、表現形式として事態の文節化を許さないものに止まることになる。ここにこのタイプを感嘆文の類型として認める根拠が求められるだろう。

さて、このタイプにはその延長線上のものと考えられる、次のように感嘆副詞によるものとコトダという形式によるものも存在する。

(10)「大変です！逃げられました！」

天党は、床にのびている見張りを見下ろすと、いかりに背ざめた。

「何でござまだ！一早く、島中に警報を出せ！何としても見付け出すんだ！」(青春共和国、118)

(11)「まあ、おもしろい坊ちゃんですこと！」(子供、97)

(10)のような文での副詞は、本来の不定語の用法から修飾的なものに代り、名詞を修飾する形容詞の代りに用いられるものであるが、その程度が言い尽くせないほどでまさに感嘆に値するものである、というような役割をしているのであろう。また、(11)は「客+主+コト」の形で急激な感情的な経験を表出するものである。

3-2 擬似感嘆文(quasi-exclamatory sentence)

しかし、言語主体の驚きや感動を表すものが上記の文形式に限るわけではない。次のように平叙文や他の形式を用いた場合でも卓立な音調を伴ったり、特別な表現形態を用いることによって可能である。ここでは疑似感嘆文、いわゆる詠嘆のタイプを提示しよう。

う。

(12)圭介は、書類靴をソファに置くと、ネクタイを外して、ソファに座った。

「一ああ、くたびれた!」(やりすごし、16)

(13)「なあんだ、そこにいたのかあ」(寒い朝、139)

(14)「私、図書館で時間を潰すわ」

「それで昼を食べて帰るんじゃないのか?」

「あら、はっきり言うわね!」(ハムレット下、54)

(15)十津川と、亀山は、この二つの車両の写真を比べてみた。

「そっくりじゃありませんか」亀山は、嬉しそうにいった。

「確かに、よく似ている」(EF、31)

(12)がいわゆる平叙文の場合であり、(13)が疑問文の場合である。また、(14)が終助詞ネ(ナ)によるものであり、(15)がジャナイカによるものである。これらは「主体の強い情意を表現する」点では感嘆と同様であるが、その表現形式に違いが認められるのである。

4. ダロウによる感嘆文の特徴

ここでは冒頭で提示した「ナンテ(ナントイウ)～ダロウ」のような文型をとり挙げ、意味・統語・構文的な観点からその特徴を検討することにする。

4-1 喚体的な側面

まず喚体的な側面としては、体言を中心骨子とする構文的な特徴を挙げられよう。構文的には、感嘆副詞の修飾する対象(つまり、情意の中核になる対象か連体格か)によって、大きく次の二つのタイプに分けることができる。

4-1-1 ナンテ+名ダロウ

まずは感嘆副詞が対象である名詞を修飾する場合である。

(16)即席に組んだ足場の上ではモーニング・ショーのレポーターがマイクを握って、実況中継の最中らしい。

「何て連中だろ!」(結婚、236)

(17)「この期に及んで、まだ私の子供を欲しがっているとは、何といういじらしさだろうって、わたしは思わず泣けてしまいましたよ」(愛人、181)

上例のようにこのタイプでは、連体格の代りに感嘆副詞が用いられたもので、例えば、(16)では対象である「連中」の行動があまりにも予想外のもので言い表わしようがないことを、(17)では主体に情意をもたらした「イジラシサ」にあまりにも感激したあまり、そのイジラシサを言語ではとても表現しがたいことを、不定語とダロウを修辭的に用いて表現するものである。

次例もこのタイプの延長線上にあるものと思われるが、体言止りでないのが注目される。例(18)に即して言えば、情意の中心部分である思イチガイがあまりにもとんでもないので、言語では表現しがたく、驚きに値するものである、ということまでは前節と同様である。しかし、省略可能であるその対象のあり方が言語化されること、換言すれば、事態をより具体的に描写されることによって、いわゆる述体に近付いているものと考えられる。

(18) (兄と二人で?) 陽子はあまりのことに呆然とした。

(何という思いちがいをしていたのだろう) (氷点下、283)

(19) 「わたしは、家の前に他人がたかってくるのが大嫌いなんだよ。おまえも、知っている筈じゃないか。なんていうことをしてくれるのだろう」(子供、197)

以上、感嘆副詞ナンテ・何ト(イウ)が情意の対象にかかるタイプを指摘してきたが、これらは、構文・意味的に次のような英語のWHAT型の感嘆文に酷似しており、非常に興味深い。

(20a) What a lie John tells!

b. What a place Havana is!

c. *What beautiful this place is!

b. *What eagerly he learns French!

つまり、英語のWHAT型の感嘆文は基本的に名詞句の直前に現われる時に用いられ、その名詞句の性質・種類があまりにも予想外のもので、変則的であることについて感嘆を表わすのである。

4-1-2 ナンテ十形十名(ノ)ダロウ

次のタイプは感嘆副詞が連体格にかかるものである。

(21) 「それからもお墓にはいくつかお参りをした。生活の混雑を抜け出ていくと、小さなお墓がボンとある。そのボンとあるのがじつに質素で、私はいつの間にかお墓というものに親しみを持つようになっていた。箆笥もなく、台所もなく、本棚もなく、何という気持ちのいい場所だろうと思った」(父、299)

(22) 「しかし、何て卑劣な男だろう！素手で勝負なんて、空手ができるのなら、「素手」とは言えない」(結婚、232)

上例での感嘆副詞は「気持ちがいい」とか「卑劣」とかの程度があまりにも予想外のものなので、とても言語化しにくく、まさに驚嘆に値するほどであることを、不定語とダロウを修辭的に用いることによって表現するものである。

また、次例もこの類のものであるが、情意の中核である対象のあり方が言語的な実現によって、喚体の形式上の特徴を失いつつあるものである。

㉓「まあ！かわいい。何てきれいな眉をしているんでしょう」（氷点上、142）

このタイプも次のような英語のHOW型の感嘆文と意味・構文・機能的な面において、きわめて類似しており、本稿の分類の妥当性が支持される。

㉔a、How smart my students are！

b、How surprisingly well she dances！

c、How she upset herself！

d、*How a beauty she is！

まず構文的には、HOW型の感嘆文は上例のdのように名詞を修飾することができない。^{注5}

次に、機能的には、HOWに修飾された語によって示されている「程度」が、一定以上の段階に達していることを表わすものである。

以上、感嘆副詞がどこにかかるか、という観点から「ナンテ（ナントイウ）～ダロウ」の文を大きく二分し、その特徴を記述した。この種の文は意味的にすべて発見的な事態の遭遇による、主体の緊迫した情意を一体的に表現しているものである。構文的に注目すべきは、すべての文に連体格部分と情意の中核である体言（中心骨子）を備えている点と、文の終わりが体言かそれに準じるものである、という点である。従って、この限りではまさに山田の感動喚体に相当するものである。

4-2 述体的な側面

このダロウ文の述体的な特徴としては、まず題目が出現し得ることである。具体例を挙げよう。

㉕「残酷だわ！そんなこと。何ていやな方なんでしょう、あなたは！」（春の飛行、94）

㉖「あなたはそういう人なんだ。いつもそういう人なんだ。それなのに、僕は何という残酷な人間なんだろう。あなたとは、もう結婚できないということを言いに来たんです」（春の飛行、192）

上例のように題目が現れるということは、事態のとらえ方が二項対立的な主述へ分節されること、つまり「理性的な二元性の発表たるもの」という述体の表現形式であることを意味する。

次はテンス・アスペクトの出現である。実例を少し挙げよう。

㉗「困って泣き出すかと思った陽子は、予期していたかのように、振当てられた役を十分に練習した俳優のように、何と見事に落ちついて果たしたことだろう」（氷点下、146）

㉘「まあ！かわいい。何てきれいな眉をしているんでしょう」（氷点上、142）

㉗は過去形のタが顕在した例であり、㉘はテイル形が表れた例である。このように、典

型的な述体の固有の文法範疇とでも言うべき、テンス・アスペクトが分化するということは、述体の性質をも伺わせることに他ならない。

次はこのダロウ文が条件文の後件で用いられた場合である。

(29)「で、出たらね、なんていやなところに住んでたんだらろうと思う」(話、194)

(30)「あなたから聞いた話を主人に云って、問い詰めたんです。そうすると、なんと図々しいんでしょう。主人は全部を否定するんです。ですから、わたくしは、その女の居るアパートまで行ってみたんです」(事故、96)

(30)は事実的な条件文の例であり、(29)は仮定条件文の例である。条件文の後件としてこのダロウ文が用いられることは、情意のきっかけにある事態との遭遇が談話の現場でなくて、ある条件の中でもいい、ということである。このことも発話時における具体的な情意ではないので、情意の表出というより情意の描写といった方が妥当であろう。

4—3 本稿の位置付け

以上、ダロウによる感嘆文の性質を、意味あるいは統語的な面から検討してきた。まず構文的な観点から言えば、「述体格+体言」という、いわゆる喚体の形式上の特徴を有する、現代語では数少ない文型である、ということが言えるだろう。反面、統語的な面からは、題目の出現する点や過去の出来事を表わし得るテンス・アスペクトという文法範疇の出現する点や事態の現場性の減退する条件文の後件として出現する点などのいわゆる述体の特徴も見られた。

このように喚体と述体の両立的なありようをみせる構文を、本稿で感嘆文と呼ぶことには、上述した統語的な理由以外に、次のような理由もある。

第一は、述体の特徴を見せる例でさえ、このダロウ文主体の強い情意を表現していることである。つまり、この構文は直感的であろうが理性的であろうが、主体の強い感情的経験を表現する専属形式である、という点である。

第二点はナンテ(ナントイウ)の副詞の共起問題である。ナンテ(ナントイウ)の副詞は、感嘆文以外の他の文では共起出来ないものだからである。

5. おわりに

以上、現代日本語を対象として、主体の強い情意を表わす感嘆文を意味的・構文的な観点から、純粹感嘆文と疑似感嘆文に分けることを指摘し、その基準から認められるいくつかの文類型を提案した。そして、本稿で提案した枠組みの中で冒頭のダロウの文の位置付けを試みた。また、このダロウの文を意味的な面だけでなく、構文・統語的な面をも合わせた総合的な考察を行ない、この文型がいわゆる喚体と述体の両面性を有する現代日本語では特殊な感嘆文型であることを論じた。

〈注〉

- (1) もっとも後述するように、このダロウ文が山田博士の喚体の条件をすべて充足させるわけではない。
- (2) ここで言う感嘆詞は主に主体の感情・感覚の表明としてのものだけで、呼び掛け表現や応答表現などは除外する。
- (3) 本稿で感嘆文として認める三つのタイプは、すべて尾上(1986)五つの中に入っているものである。しかし、本文で述べたようにその内包はやや異なる。
- (4) ここで基本的にというのは、主要名詞を修飾する語が many, much 等の場合が除外されるからである。勿論、この場合は HOW 型の感嘆文になる。
- (5) ただし、限定用法の形容詞の場合は、次のように両者が使用可能のようである。しかし、これも構文の環境によってどちらか一方だけが用いられ、両者は完全に相補分布 (complementary distribution) をなしているという。詳細は今井・中島(1987)を参照されたい。
 - ① a. What a beautiful place Havana is!
 - b. How beautiful a place Havana is!

〈参考文献〉

- 今井邦彦・中島平三(1987)『現代英文法第5巻 文Ⅱ』研究社出版
- 尾上圭介(1983)「不定語の語性と用法」渡辺実編『副用語の研究』明治書院
- (1986)「感嘆文と希求・命令文」『松村明教授古稀記念国語研究論集』明治書院
- 川端善明(1963)「喚体と述体—係助詞と助動詞とその屈—」『女子大文学』大阪女子大学紀要(国文編)15号
- (1965)「喚体と述体の交渉」『国語学』63号
- 国立国語研究所(1960)『話しことばの文型(1)』秀英出版
- (1963)『話しことばの文型(2)』秀英出版
- 鄭 相哲(1993)「ダロウカの意味・用法の記述」『世界の日本語教育』3号
- 寺村秀夫(1984)『日本語のシンタクスと意味Ⅱ』くろしお出版
- 益岡隆志・田窪行剛(1992)『基礎日本語文法|改訂版|』くろしお出版
- 宮地 裕(1954)「いわゆる「文の性質上の種類」の原理とその発展」『国語国文』23-11
- (1958)「文と表現文」『国語国文』27-5
- 山田孝雄(1926)『日本文法學概論』宝文館出版

〔付記〕

本稿は1989年岡山大学に提出した修士論文の一部に、修正・加筆したものである。岡山大学在学中には赤羽学先生の学恩を蒙ることが大であった。記して深謝申し上げる。

(大阪大学大学院文学研究科 専士課程)